



HACK

10

狂気

KAI SHIGIHARA



10 狂気

ゆっくりと意識が浮上していく。同時に、自分が意識を失った状況もしだいに思いだし、レスリーは途中から一気に覚醒した。

「目が覚めたね」

忘れられない声。忘れようと努力して、結構いいところまで行っていたと思うのだが、これでまた最初からだ。

けだるくて上手く動かない体に命令し、頭を声のした方へとめぐらせる。レスリーが横になっているベッドのすぐわきにある椅子に、ケ빈は座っていた。膝にひじをつき、レスリーの方へと身を乗り出している。

たった二年だ。ケ빈は何も変わっていなかった。ブロンドで、青い瞳で、笑顔の素敵な好青年。ぱっと見た目は。ケ빈は女性にとっても人気があったし、レスリーも夢中になったときがあった。忘れたい、黒歴史だ。

「久しぶりだ、レスリー」

「……接近禁止令、忘れたの？」

頭を動かしているのさえしんどくて、レスリーは上を向いて重く感じる頭を枕に沈めた。そして、ゆっくりと息をつく。

しんどくて頭の働きが鈍っているせいもあるが、想像していたよりずっと落ち着いている。予兆があって覚悟していたとはいえ、パニックも起こしていない自分にほっとする。

ケ빈は一筋縄ではいかない相手だ。冷静になって、全力で対応しなければ、何をされるかわからない。逃げることで出来ないうらう。

「仕方がないじゃないか。君がとんでもなく悪い男にたぶらかされていたんだ。僕が助けに行く必要があった」

ケ빈は爽やかな笑顔を浮かべる。

昔は、彼のこの笑顔に心をときめかせたものだ。今は、その爽やかな顔が歪んで見える。

「ありがとう、ケ빈。でも、私は大丈夫よ」

ケ빈の取り扱い方法は、昔しっかりと学んだ。彼を否定しては駄目。彼の妄想の中で、レスリーはずっと恋人なのだ。レスリーの拒否は、周囲に言わされていると思っているし、いつまでも二人は愛し合っていると思っている。

ある程度は、彼の妄想に付き合うことも必要だ。今のように、彼に拘束されているときは、特に。

「あれはね、お芝居なの。厄介な、仕事をしているのよ」

「仕事？ 仕事で君は他の男とホテルに泊ったりするのか！」

「寝室は別よ。勿論」

「君はとても魅力的な女性なんだよ、レスリー。同じ部屋に宿泊して、何も無いなんて信じられない」

(ジュリアスが聞いたら、なんて言うかな)

ホテル宿泊中は、お互いに衝動に走らないよう注意して、それはもう礼儀正しい生活をした。だがそれは、ジュリアスがレスリーに魅力を感じていなかったわけではない。ジュリアスの熱い視線に気づいたのは一度や二度ではなかった。

(彼は私を大切にしてくれてる)

仕事相手とそういう関係になりたくないと言ったレスリーの気持ちを、きちんと尊重してくれた。

今も、レスリーがそういう気持ちになるまで、待とうとしてくれている。そして、今きっと、レスリーを救い出そうと動いてくれている。

(私は一人じゃない)

「君と離れているのは、もう耐えられない。結婚しよう、レスリー」

「無理よ。わかっているでしょう？」

「レイノックスで結婚するんだ。レイノックスでなら出来る」

ケ빈は狂っていると、レスリーは確信している。だが、レスリーに対する狂気とは別に、冷静に現実に対処している面もある。きちんと社会に適応し、法律を利用したり、警察や軍を味方につけるための工作だってする。だから、レスリーはなかなか別れられなかったのだ。

付き合いだしてしばらくして、レスリーはケ빈の異常性に気がついて、周囲に相談した。だが、周囲は誰もわかってくれなかった。ケ빈は天才だから、ちょっと常軌を逸しているところはあるよと、諭されるぐらいだった。天才的な工学者だったケ빈は、マッドサイエンティストと呼ばれ、時々飛び出す一風変わった言動や行動も、天才だからと受け流されていた。レスリーが裁判を起こすまで、周囲は誰もレスリーの訴えを本気にしてくれなかったぐらいだ。

「愛しているんだ、レスリー。他の男が君に近づくのは耐えられない」

レスリーを愛していると言うが、それは違う。ケ빈が愛しているのは、自分自身だけだ。

ケ빈の中で、世界は彼を中心に回っている。天才的な頭脳を持つ彼にとって、世の中はすべて自分の思い通りになるのが当たり前で、誰もが彼の望むとおりにならなければならないのだ。

そんなケ빈の理想的な花嫁が、レスリーなのだろう。健康で運動神経も悪くなく、一般的な評価として美人で、IQも高い。しかも、レスリーの夫は、伯爵になれるという特典付き。ケ빈は、レスリーを愛すると決め、結婚すると決めた。そして、そのためにまず、レスリーに自分を愛させるようにすることから始めた。当時、二十二歳だったレスリーは、それはもう呆気なく、ケ빈を好きになってしまった。子供だったと思う。

「結婚は出来ても、伯爵になれないわ」

「まあ、すぐにはね。でも、ちゃんと考えてある」

「ケビン、私の父は遺言状をちゃんと書いているのよ。父に認められなければ、爵位は絶対にあなたのものにはならない。父を無視してレイノックスで結婚して、どうやって父に認められるというの」

健康やIQだけなら、レスリーの他にも該当する女性はいくらでもいる。その中でもレスリーが花嫁に選ばれたのは、伯爵になれるからだ。

この国において、貴族というのは、別世界の生き物だ。ごく限られた超特権階級。自己愛が強く、自意識も強いケビンが、その貴族になることを望まないはずがない。だが、とても閉鎖的な貴族社会に一般人が参加するのはほぼ不可能に近い。一般人が爵位をもらって貴族になるということは、まずない。国のために大きな功績を残せば可能性はあるが、それだって一代限りの爵位だったりというのがほとんどだ。ケビンが貴族になろうとするのなら、爵位を持つ女性と結婚するしかない。

レスリーの父は、ケビンとの裁判中に、もしレスリーがケビンと結婚するようなことがあっても、爵位をケビンに譲らないという遺言を書いた。もしそうなった場合、爵位は女王陛下に返上するとされ、女王も了承している。勿論、ケビンがこれ以上娘に執着するのをやめさせるためだ。

「遺言については、君にお願いするしかない。父上の気を変えてほしいんだ」

「父の気を変えるのは、私ではなくあなたでしょう。あなたが父に気にいられなければ、どうしようもないわ」

「だから、それには君の助力が必要なんだ」

「……まさか、私を誘拐して父を脅迫するつもり？」

「最終手段だけだね」

驚きに、レスリーは声も出なかった。

それで伯爵になったとして、貴族社会に受け入れられるわけがない。そもそも、父が脅しに屈したとしても、女王陛下がケビンを許すわけがない。それがケビンにわからないはずがないのに。

(ケビンの狂気は二年前より進行してしまっているの?)

レスリーの背筋をぞくりと冷たいものが落ちて行く。

二年前のケビンには、裁判を受け、裁判所命令に従うだけの正気は残っていた。だが、今、接近禁止令は無視され、レスリーは何処ともわからない場所で拘束されている。

(だとしたらどうしよう)

頭がいい分、ケビンは何をするのかわからない。常識とか法律とか社会とか、そんな制約を無視しだしたら、どこまでもおかしくなってしまうような危うさがある。

「そんなことは、僕だってしたくない。穏便にすませようと思っているよ」

にっこりとほほ笑むケビンの笑顔に、レスリーはもう狂気しか感じなかった。

カウンセラーが言っていた。天才的な頭脳を持ち、容姿端麗なケビンは、これまでの人生で自分の思うようにならなかったことは、一度もなかったのかもしれない。ケビンの思う通りにならない初めての人がレスリーで、望んで初めて手に入れられないのが、爵位なのかもしれないと。

レスリーはもう二度とケビンには騙されないし、愛することも決してないだろう。そして、爵

位をケビンに与えられるのは、女王だけ。その女王陛下も、レスリーの父からの訴えを聞き、更にはレスリーの裁判記録にも目を通してという。聡明で知られている女王が、ケビンに爵位を与えることは未来永劫ないだろう。

だが、ケビンにはその事実が認められない。生涯、認めることは出来ないかもしれないと、カウンセラーも言っていた。だが、レスリーのいない世界で、別の形で満足を得ることにより、執着は薄らぐかもしれないとも言ってくれた。

(多分、煮詰まったんだ)

この二年、ケビンが何をしていたのか、レスリーは知らない。知りたくもなかったから。だが、彼の頭脳があれば、社会的に成功することは難しくない。今の彼を見る限りでは、以前のように自信にあふれているし、身ぎれいだ。人生の敗北者になっていると思えない。それでも、ケビンはこの二年、レスリーと爵位を手に入れることばかり考えていたのかもしれない。レスリーと女王の心という、物理的にはどうやっても変えることが出来ないことを、なんとかしようと思いつめたのかもしれない。

「ケビン、ここはどこなの？」

「レイノックスだよ。僕達はここで結婚するんだ」

「こんなところで結婚なんて、父は許してくれないわ。帰国して、父に結婚の許しを請いましょう」

「許しを請うのは、結婚してからでいい」

その時、ぴぴっという軽いアラーム音が、ケビンのつけている腕時計からなった。どうやら、腕時計ではなく、小型のモニターらしい。表示された情報をさっと見ると、ケビンは眉をひそめた。

「……君は軍になど就職するべきではなかった。知ったときは、失望したよ」

それはよかった。退屈な仕事にも耐えたかいたがあったというものだ。

勿論、軍に就職したのは偶然なんかじゃない。軍という強大な力と、国家に守ってもらえるからだ。事務官とはいえ、軍の職員であるレスリーが拉致監禁されたとなれば、きっと軍は助けようとしてくれるはず。もしかしたら、もう動いてくれているのかも。

「軍人など、野蛮で低能な生き物のくせに、僕に盾突こうなど、身の程知らずな」

その時、レスリーは、ケビンが足を負傷していることに気がついた。まだ、体は重く、目もよく見えないのだが、ケビンが座っているのは椅子ではなく車椅子のようにも見えた。

「油断して撃たれたが、僕は仕留めてやった」

「え」

「五月蠅い連中を片づけてくる。君はここで大人しくしているんだ。いいね、レスリー」

「ケビン、待って、仕留めたって」

やはり、ケビンが座っていたのは、車椅子だった。しかも、電動らしく、自動で動き始める。

レスリーに背中を向けると、部屋の奥にある扉へと進んでいく。

「待って」

声はでるが、腕や足を動かすことが出来ない。この不自然さは薬のせいだろう。

「ケビン！」

なんとか大きな声をだせたが、車椅子のケビンはもう部屋の中にはいないようだった。視力が弱く、視界も狭いせいで、部屋の中のこともよくわからない。

(仕留めたって、ジュリアスを?)

涙があふれてくる。こめかみをながれ、耳の中へと落ちてくる。

(そんな、そんな)

嘘だと思いたい。ケビンは時に平気な顔で嘘をつく。

だが、ケビンは足を負傷していた。撃たれたと言っていた。ジュリアスと撃ち合いになったのかもしれない。ケビンは足を撃たれ、ジュリアスは致命傷を?

ケビンはライフル射撃をやり、レスリーと良好なお付き合いをしていた頃は、レスリーの父と狩りにも行ったことがある。射撃の腕は確かなのだ。

(私のせいだ)

ちゃんと話して警告するべきだったのに。知られたくないなんて、自分のことばかりで。ジュリアスが危険かもしれないって、わかっていたのに。

(ああ、どうしよう)

嘆いても、もう手遅れだ。判断を誤った。また、誤った。

今度の代償は大きい。取り返しがつかない。

(ジュリアス、ごめんなさい、ジュリアス)

泣いたせいか、頭の中がますます混濁してくる。目を閉じれば、頭の中がぐるぐる回っていた。

レスリーはそのまま、再び意識を失った。